令和２・３・４年度　鹿屋市研究協力校「心の教育」

鹿屋市立西原小学校　研究公開　研究の概要について

１　本研究のはじまり（令和元年度　校内研修から）

（１）子どもの実態からの研究領域設定

【子どもの外面的な部分】
- 暴力的な子ども
- 暴言を吐く子ども
- 石を投げる子ども
- ものをかくす子ども
- ものを壊す子ども
- 授業に集中できない子ども
- 指示が通らない子ども
- 勉強道具を忘れる子ども
- 姿勢が常に乱れる子ども
- 活動等ができない子ども

【子どもの内面的な部分】
- 自分に自信をもてない
- 自分のよさがわからない
- 気持ちを素直に表現できない
- 他者より優位に立ちたい
- 見て欲しい，構って欲しい
- 他者より優位に立ちたい
- 他者に共感できない
- 他者を思いやれない
- 他者とうまく関われない
- 他者を敬う気持ちをもてない

子どもの課題を
解決していく

↓

困っている子ども！

「心の教育」
の充実

↑

子どものよさを
伸ばしていく

【子どもの外面的な部分】
- 活動的である
- 進んで他者に関わる
- 友達と仲よく過ごす
- 友達を大切にしている
- 他者の手伝いをする
- 他者のよさを見つけている
- 他者のよさを認めている
- 他者の意見を受け入れる
- 他者を助ける子どもがいる
- 他者に関わる子どもがいる

【子どもの内面的な部分】
- 明るく元気である
- 負けず嫌いである
- 責任を果たそうとする
- 目標を目指そうとする
- 意欲的な子どもがいる
- 積極性がある子どもがいる
- やる気がある子どもがいる
- 他者に関わろうとする
- 褒められるとがんばる
- 慣れることがはやい

※　１－（１）については，令和元年度・教職員からの所見を基にしたものである。

※　数値化されたものや年度当初・年度末に変容が分かるものも把握し研究を進めていく。

（２）研究体制

ア　鹿屋市教育委員会の指定　…優先的な指導主事等の講師派遣，市教委と連携した課題解決

イ　各関係機関との連携の推進…校内の事例研修・情報交換だけでは限界があるため

ウ　全校体制づくりの具体化　…「全員での研究，研究の成果は子どもの姿で」をよりいっそう強固なものにするため

（３）新研究３年目（最終年度）へ向けて

ア　Ｈ２６～２８年度「心の教育」及びＨ２９～Ｈ３１・Ｒ１年度「算数科」の研究の成果を踏まえる。

イ　Ｒ２～３年度の研究を踏襲し，全職員が共通理解をして，何を進めていくのか明確化する。

ウ　Ｒ２～３年度の研究内容**「心に届く授業の在り方」「授業以外の取組」「家庭・地域との連携」**

エ　Ｒ２～３年度の**目指す子ども像「善悪の判断，周りへの思いやり等がしっかりと身に付いた子ども」**を全校体制で育てる。

オ　生徒指導，特別支援教育，人権同和教育の側面を踏まえ，全校体制で取り組んでいく。

（４）研究テーマのキーワード　…　子どもの実態，教師の願い等

自己肯定感　自己理解　他者理解　認め合う力　←　キーワードとして使うために「力」を追加

（５）研究テーマ

自己を見つめ，他者のよさに気付き，互いに認め励まし高め合う子どもの育成

～自己肯定感を高める取組を通して～　※　サブテーマ：Ｒ２年度末に設定

（６）内容

【令和元年度・教職員の所見を基にした内容】

ア　交流活動の充実　学び合い
　・　ペア，グループ，ワールドカフェ
イ　ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり
ウ　特別活動の充実
　・　よさを発揮できる行事，話合い活動
エ　道徳の充実
オ　生徒指導の充実
カ　構成的グループエンカウンターの充実
キ　学級経営の充実
ク　教科指導の充実
ケ　特別支援教育の充実
コ　ボランティア教育の充実

令和元年度末に出された内容を整理

学習活動の工夫	指導方法の工夫	学級経営の充実
ク　教科指導の充実 ウ　特別活動の充実 ・　よさを発揮できる行事，話合い活動 エ　道徳の充実 コ　ボランティア教育の充実	イ　ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり ア　交流活動の充実学び合い ・　ペア，グループ，ワールドカフェ	キ　学級経営の充実 ・　構成的グループエンカウンターの充実 ケ　特別支援教育の充実 オ　生徒指導の充実

授業　　授業外

Ｒ２年度当初に再整理した研究内容
Ｒ２年度研究内容として取組を追加

心に届く授業の在り方	授業以外の取組	家庭・地域との連携
学習活動の工夫	学級づくりの工夫	家庭との連携
指導方法の工夫	特別支援教育の充実	地域との連携
カリキュラム・マネジメント	**生徒指導の充実**	

学校内の生活　　学校外の生活

２　本校の研究の流れから

（１）Ｈ２６～２８年度「心の教育」の研究から

この研究は，今年度から始まる新研究と同領域のために，その成果や課題を基にして取組を継続したり，研究内容を加えたりすることで研究を深めていくことにしました。そのために，３年間の研究の取組，成果と課題を振り返ることにしました（**図１**）。

平成２６～２８年度鹿屋市研究協力校（心の教育）

【研究主題】

自己を見つめ，互いを認め，よりよい行動ができる子どもの育成

～対話活動を中心とした心の教育の取組～

【仮説１】道徳，教科等の時間において，自己を見つめ，互いを認める活動を工夫すれば，自らよりよい行動を選択，実践する子どもが育つのではないだろうか。

取組１　…　対話活動を取り入れた道徳の授業づくり

取組２　…　対話活動を取り入れた教科等の授業づくり

【仮説２】心の教育を支えるための校内環境の整備や，地域・家庭との連携を深めていけば，道徳的価値を大切にする子どもが育つのではないだろうか。

取組１　…　「キラリカード」の取組

取組２　…　「道徳コーナー」の設置

取組３　…　学校と地域・家庭を結ぶ「思いやり通信」

【子どもの変容○成果】

○礼儀　　…８５％→９０％

・７０％が最も望ましい道徳的心情を選択

○思いやり・親切…７０％→７５％

・３０％が最も望ましい道徳的心情を選択

○尊敬・感謝　　…７０％→８０％

・３０％が最も望ましい道徳的心情を選択

（　　項目　　…Ｈ２６→Ｈ２８　　）

【子どもの変容●課題】

●礼儀

・理由「怒られるから」

・大切さや必要性を感じ取れていない

●思いやり・親切

・理由「かわいそう」同情心

・理由「助けてあげた方がよい」比較

●思いやり・親切，尊敬・感謝

道徳性検査ＨＵＭＡＮ（教育応用心理研究所）による

【今後の課題】

●グループでの対話活動の時間では互いの意見を認め合うことができるようになってきた。更に考えを深めたり，議論したりする活動になるよう課題設定を工夫する必要がある。

●よりよい行動について気付き，考えることはできるようになってきたが，自分から行動に移すことがまだできない子どももいる。実行している姿を今後も継続して紹介したり，活動の時間をつくったりしていく必要がある。

●道徳の授業で高まった道徳心はどのような場で表れ，それをどのように評価していくかについて更に検討をする必要がある。

●学校での取組を家庭・地域へ更に伝えることをで，より一層連携を深めていく必要がある。

図１　Ｈ２６～２８年度「心の教育」の研究概要

（２）Ｈ２９～３１（Ｒ１）年度「算数科」の研究から

昨年度まで研究した算数科における学習方法は，子どもが自分の考えを説明する活動を通して「自己肯定感」を高め，互いに学び合い「認め合う」ものでした。また，振り返る活動を通して「自己理解」や「他者理解」を深めるものでした。前研究の取組を算数科だけでなく，全ての教科等においても取り組んでいくことにしました（**図２**）。

平成２９・３０・３１（令和元）年度鹿屋市学力向上研究協力校

【研究主題】

自分の考えを説明する力を育てる算数科学習指導の研究

～数学的活動の充実を通して～

【仮説１】意欲をもって課題に取り組ませ，算数の知識をもとに発展的・応用的に自分の考えをまとめたり交流したりする方法や場を工夫し，繰り返し設定するならば，説明する力を育てることができるのではないか。

取組１　○主体的に取り組むための課題の工夫　○ノート指導の工夫
○評価の方法　○説明する場の設定
○数学的活動の位置づけ　○算数用語の実態把握・活用
○備品の整理

【仮説１・取組１の成果】

○「教えてタイム」→積極に学ぶ子増加
○生活経験に即した課題提示→意欲増加
○解決への見通し・説明用語を自ら獲得
○意図的な話合いの場の設定
　話合いの充実に向けての手立て
→「説明できる」自己評価７割

【仮説１・取組１の課題】

●相手に分かるように説明できる手法や姿
→言葉言い換え，図絵の付加，加除修正等
●普段から発言が少なく説明が少ない子
→機会を増やし，力をつける必要性

【仮説２】授業で学んだことを生かす場を設定し，能動的に取り組ませる工夫をするならば，これまでの学習を生かしていろいろな考えをもち発想する中で，自分の考えを明確にし，説明することができるのではないか。

取組２　○学習形態の工夫　○相手に伝えるための方法
○算数タイムの活用　○算数的環境の整備
○家庭との連携

【仮説２・取組２の成果】

○一単位時間の学んだことを生かす場設定
→内容の焦点化，積極的な問題解決
○友達の多様な考えを聞く経験
→他の方法はないかと考える子増加
○「自分の考えを文章にまとめる」６割
○ペア・グループ学習の効果６～７割

【仮説２・取組２の課題】

●子どもに領域等の系統性を理解させる
→教師の教材研究
●分からないときに自分から聞きに行く
→分からない子どもが不安にならない学級
●子どもの考えの根拠・困り感の在処
→具体的に調査・分析の必要性

図２　Ｈ２９～３１（Ｒ１）年度「算数科」の研究概要

（３）これまでの研究から

これまでの本校の研究を振り返ると下図のようになります（**図３**）。研究を進めるにあたり，これまでの研究の成果を生かし，課題を改善しながら，研究を深めていくことにしました。

研究の領域「心の教育」と同領域であるＨ２６～２８年度「心の教育」の研究を基本的な考え方にしながら，Ｈ２９～３１（Ｒ１）年度の「算数科」の研究の要素を取り入れ，研究２年目にあたる本年度の研究を進めていくことにしました。

研究期間・領域	研究テーマ　研究主題　副題
Ｈ２６～Ｈ２８：３年間 「心の教育」	自己を見つめ，互いを認め，よりよい行動ができる子どもの育成 ～対話活動を中心とした心の教育の取組～
Ｈ２９～Ｒ１　：３年間 「算数科」	自分の考えを説明する力を育てる算数科学習指導の研究 ～数学的活動の充実を通して～
Ｒ２～Ｒ４　：３年間 「心の教育」	**自己を見つめ，他者のよさに気付き，互いに認め励まし高め合う子どもの育成　～自己肯定感を高める取組を通して～**

Ｈ２６～２８「心の教育」 → Ｈ２９～Ｒ１「算数科」 → Ｒ２～「心の教育」

図３　これまでの本校の研究テーマ

３　研究構想

Ｒ１年度に校内研修で確認した研究テーマ・研究内容を基にして，本研究の研究構想を組み立てました。子どもの実態・教師の願い等から導かれた研究テーマに基づき，本校教師が必要であると考える研究内容を３つに分類しました。３つの分類のうち「心に届く授業の在り方」及び「授業以外の取組」は，子どもが学校で生活している場面としました。また，「家庭・地域との連携」は，子どもが学校外で生活している場面としました。子どもが過ごす学校内での生活全般にわたる活動や指導の手立てを工夫したり，子どもが過ごす学校外の生活においても学校からできる手立てを工夫したりすることで，子どもの育成を図ることにしました。特に，子どもにとって必要と考える，４つのキーワードに設定された子どもの力が高まるようにしました（**図４**）。

自己を見つめ，他者のよさに気付き，互いに認め励まし高め合う子どもの育成
～自己肯定感を高める取組を通して～

自己肯定感　自己理解　他者理解　認め合う力

心に届く授業の在り方	授業以外の取組	家庭・地域との連携
• 学習活動の工夫 • 指導方法の工夫 • カリキュラム・マネジメント	• 学級づくりの工夫 • 特別支援教育の充実 • 生徒指導の充実	• 家庭との連携 • 地域との連携

学校内の生活　学校外の生活

図４　研究テーマと研究内容との関連

４　研究計画

本研究は３年間の研究指定を受けています。そこで，本研究の研究内容に見通しをもつために，３年間の研究計画を立てることにしました（**図５**）。研究内容に継続して取り組み，研究したことが次年次にも引き継がれ，より充実したものになるようにしました。

	心に届く授業の在り方	授業以外の取組	家庭・地域との連携
１年次	○基本的な授業の流れ（確認） ○各教科等における「心の教育」 ○カリキュラム・マネジメント（試行）	○学級づくりの工夫（学級） ○特別支援教育の充実 ○生徒指導の充実	○学級通信の工夫（学級） ○学校からの便りの工夫 ○道徳科一斉授業参観
２年次	○基本的な授業の流れ（定着） ○各教科等における「心の教育」 ○カリキュラム・マネジメント（学年）	○学級づくりの工夫（学年） ○特別支援教育の充実 ○生徒指導の充実	○学級通信の工夫（全校） ○学校からの便りの工夫 ○道徳科一斉授業参観
３年次	○基本的な授業の流れ（充実） ○全教科等における「心の教育」 ○カリキュラム・マネジメント（全校）	○学級づくりの工夫（全校） ○特別支援教育の充実 ○生徒指導の充実	○学級通信の工夫（全校） ○学校からの便りの工夫 ○道徳科一斉授業参観

図５　３年間の研究計画

５　研究テーマ　自己を見つめ，他者のよさに気付き，互いに認め励まし高め合う子どもの育成

～自己肯定感を高める取組を通して～

（１）「自己を見つめ」とは

先の「心の教育」の研究で，「自分の思いや，自分の言動，その言動がもたらす影響などについて，他者とのかかわりの中でとらえながら，自己と対話していくこと」と定義づけていました。

子どもは自分の様子を内面的な部分と外面的な部分と両面でとらえることができます。自分の考えや思い・気持ち等の内面的な部分を「内なる自己」としました。また，自分の言葉・表情・行動・態度等の外面的な部分を「外に表れている自己」としました。**子ども自身が，「外に表れている自己」の姿に「内なる自己」を素直に映し出すことができているのか，心の中の対話を通して自分の思いに沿ったよりよい姿を求めていくこと**を「自己を見つめ（る）」としました（**図６**）。

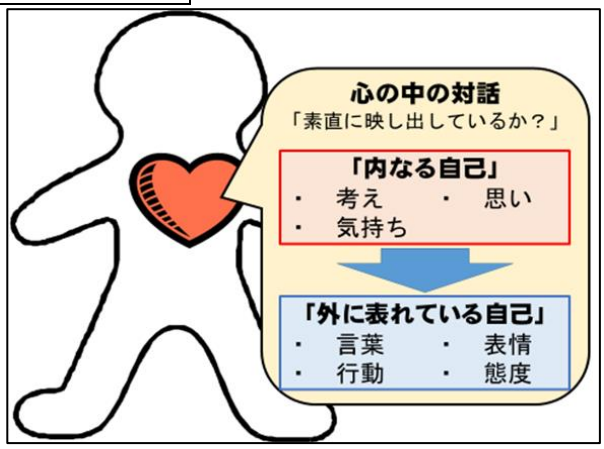


図６「自己を見つめ」

（２）「他者のよさに気付き」とは

子どもは多くの他者と関わりながら毎日の生活を送っています。他者との関わりの度に多くの感情を抱いて過ごしています。他者の表現を受容し，自己の心の中の対話をとおして，他者の心の中を想像し，表現しています。**子どもが「自己を見つめ」ると同様に他者を見つめ，自分と違う部分を自分に生かすことができる他者のよさとして受け入れることを**「他者のよさに気付き（く）」としました（**図７**）。

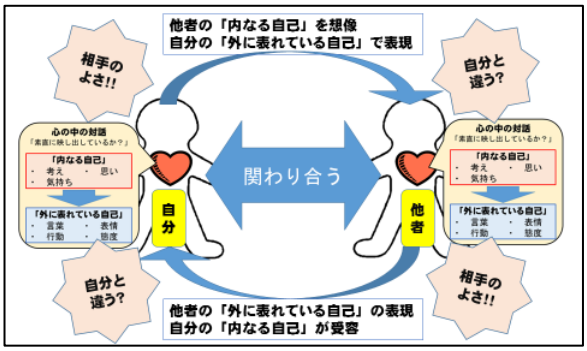


図７「他者のよさに気付き」

（３）**「互いに認め励まし高め合う」**とは

子どもは他者と関わる中で成長しています。子どもは，他者が欲していることや他者のためになりそうなことに気付き，自分にできることを考え，励ます等の行動に移していきます。他者は自分との関わりにより課題を解決したり，成功体験をしたりするなどの高まりが見られます。**相手の高まりと関わりながら自分自身の高まりも実感するなど，相互に関わり合いながら高め合うこと**を「互いに認め励まし高め合う」ことにしました（**図８**）。

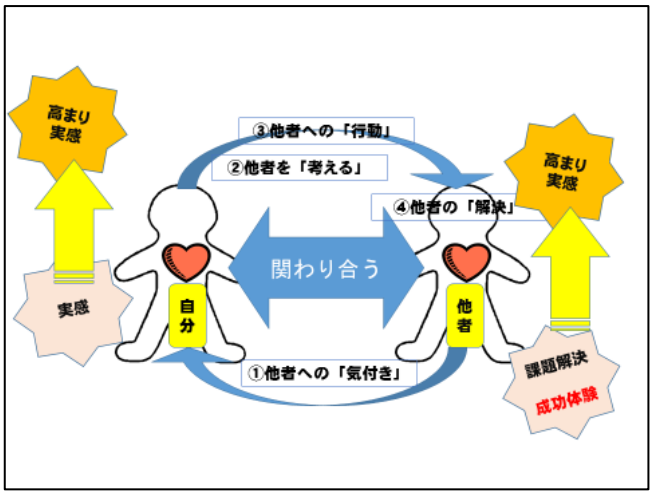


図８「互いに認め励まし高め合う」

（４）研究テーマの３つの要素の関連

本研究テーマにあるように，子どもは心の中の対話をしながら，「自己を見つめ」ています。「自己を見つめ」ることをとおして，他者のことも自分と同様に見つめ「他者のよさに気付（き）」くことができるようになります。自分と他者とが相互に関わり合いながら，よりよい姿を目指し「互いに認め励まし高め合う」ようになると考えます。このように子どもが互いに関わり合い，高め合うことができるようにしました（**図９**）。

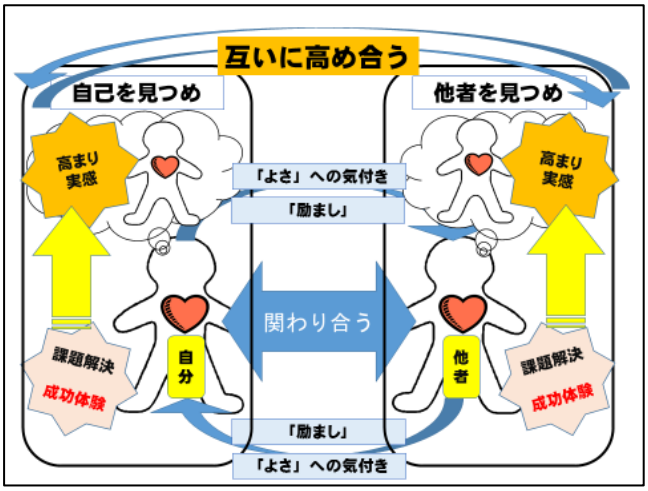


図９　３つの要素の関連

（５）子どもに必要な力「４つのキーワード」

本校の子どもの実態や教師の願い等から子どもに必要な力を「４つのキーワード」としました。

研究テーマと「４つのキーワード」の関連について考えることにしました（**図１０**）。

子ども自身が「自己を見つめ」ることで「自己理解」を深めていきます。また，自分と関わる他者を自分と同様に見つめることで「他者のよさに気付（き）」くことができ「他者理解」を深めていきます。そうすることで，自分と他者が関わり合うことで「互いに認め励まし高め合（う）」い，「認め合う」力が育ちます。子どもが「自己理解」「他者理解」を深め，他者と互いに「認め合う」力を高めていくことにより子ども自身の「自己肯定感」が高まっていくのではないかと考えました。

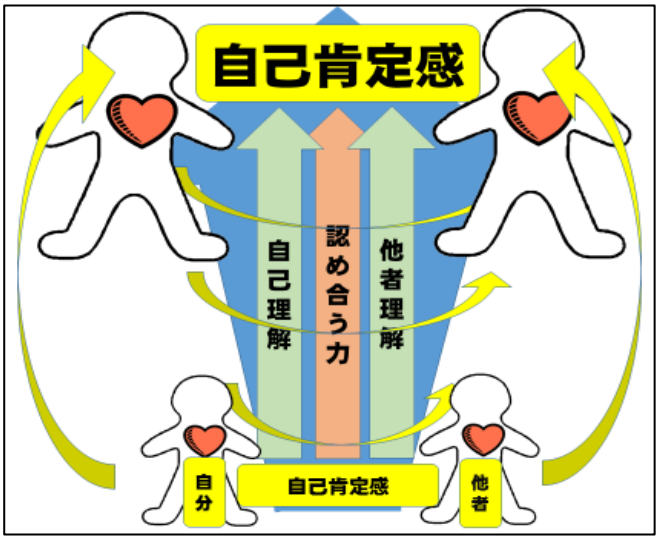


図１０「４つのキーワード」の関連

６　目指す子ども像

本研究では，研究テーマ及び「４つのキーワード」に基づき，目指す子ども像と子どもの発達段階における目指す子どもの姿を設定しました（図１１）。

研究テーマ	自己を見つめ 「自己理解」を深める	他者のよさに気付き 「他者理解」を深める	互いに認め励まし合い高め合う 「認め合う力」を高める
	「自己肯定感」を高める		
目指す子ども像	善悪の判断，周りへの思いやり等がしっかりと身についた子ども		
低学年	○「内なる自己」を素直に「外に表れている自己」に表現できる。	○自分と他者の違いに気付き，他者の姿を受け入れることができる。	○他者に気付き，他者に関わろうとすることができる。
中学年	○自分の姿を客観的に見て，心の中の対話をすることができる。	○他者を見つめ，他者の姿を受け入れ，理解することができる。	○他者を見つめ，自分にできることを考え，他者への行動に移すことができる。
高学年	○自分の思いに沿ったよりよい姿を「外に表れている自己」で表現できる。	○他者を見つめ，他者の自分との違いを自分に生かすことができる。	○他者と関わり合い，他者の高まりや自分の高まりを実感することができる。

図１１　子どもの発達段階における目指す子どもの姿

７　研究内容について

本校の子どもの実態や教師の願い等から出た意見をもとに研究内容を設定しました。研究テーマの追究を目指し，道徳科をはじめ全ての教科等における授業だけでなく授業外の活動を含む全教育活動において研究を進めていくことにしました。また，学校内だけでなく学校外の家庭や地域での社会生活においても，学校を中心とした連携をすることにしました。子どもが過ごす様々な時間や場所において，子どもを育むための手立てを講じていくことにしました。

ア①授業の目標の設定
・授業の目標に単元・題材の「学びに向かう力・人間性等」を意識する。
・本研究に関する子どもの変容や教師の振り返りを把握する。

過程	学習過程	学習活動
導入	つかむ 見通す	1　学習課題をつかむ。 2　学習問題を立てる。 3　予想を立てる。
展開	調べる	4　自分で調べる。 5　他者と交流する。
終末	**まとめる** **生かす**	**6　学習問題をまとめる。** 7　見届ける。 **8　振り返る。**

ア②学習過程の工夫
・本時の学習の流れをつかむ。
・方法と結果に見通しをもつ。

イ②交流活動の充実
・他者と関わり，互いに高め合う。
・自分の考えを再構築する。

ア③振り返り
・内容・方法，自他を振り返る。
・自他の学びに実感をもつ。

イ①ユニバーサルデザインの視点
・子どもが学習内容や学び方に見通しをもつ。
・子どもが主体的に学ぶ。

図１２　一単位時間における学習活動の工夫

（１）心に届く授業の在り方

子どもが学校生活において一番学びにつながる授業について考えることにしました。本研究の研究領域である「心の教育」をテーマに新学習指導要領に沿い全ての教科等における「学習活動の工夫」を行い，それらを育むための「指導方法の工夫」を行うことにしました（**図１２**）。また，子どもの実態を基にして，本研究領域に関連する「目指す子どもの姿」を設定し，各学年における題材・単元等を関連づけながら指導するカリキュラム・マネジメントにも取り組むことにしました。

ア　学習活動の工夫

これまでも全ての教科等の目標の達成を目指し授業づくりをしてきました。指導する内容に沿って学習活動を工夫し，子どもが興味・関心をもって参加することができるようにしました。しかし，学習活動にうまく参加することができない子どもも見られました。そこで，全ての子どもが主体的に学ぶことができるような学習活動を工夫することにしました。

【生活単元学習における学習の様子】

（ア）授業の目標の設定

毎時間の授業において，目標を設定し，子どもの姿や成果等を基に評価してきました。各教科等の単元・題材，学習過程により重点を設定して指導したり，評価したりしてきました。本研究では，全ての子どもが主体的に学習に取り組む態度等を含む「学びに向かう力・人間性等」を中心とした授業づくりをすることにしました。毎時間の授業においては，指導内容に沿った重点とすべき目標と単元・題材を通して設定されている「学びに向かう力・人間性等」の目標を設定することで，子どもの変容や教師の振り返りに生かすことができると考えました。

授業において，本研究における「目指す子どもの姿」を意識しながら，子どもが意欲的に学習に取り組むことができるために手立てを講じることにしました。

（イ）学習過程の工夫

毎時間の授業において，子どもが見通しをもって学習に取り組むことができることは，主体的に学ぶことにつながります。一単位時間の基本的な学習過程を設定して授業を行うことで，子どもが授業の流れに見通しをもつことができます。学習課題を基に学習問題を設定し，方法と結果の見通しをもちながら追究し，子どもが練り合いながら解決していく問題解決的な学習過程を基本として，授業づくりを行うことにしました。

過程	学習過程	学習活動
導入	つかむ 見通す	1　学習課題をつかむ。 2　学習問題を立てる。 3　予想を立てる。
展開	調べる	4　自分で調べる。 5　他者と交流する。
終末	まとめる 生かす	6　学習問題をまとめる。 7　見届ける。 8　振り返る。

図１２参照　問題解決的な学習過程

（ウ）振り返り

毎時間の授業において，子どもが振り返る時間を設定しました。一単位時間の振り返りをすることで，何を学んだのか，どのように学んだのか，学習の内容や方法を振り返ることができるようにしました。また，単元を通して振り返りを積み上げることで，一連の学習にどのような学びがあり，様々な学び方があることにも気付くことができます。

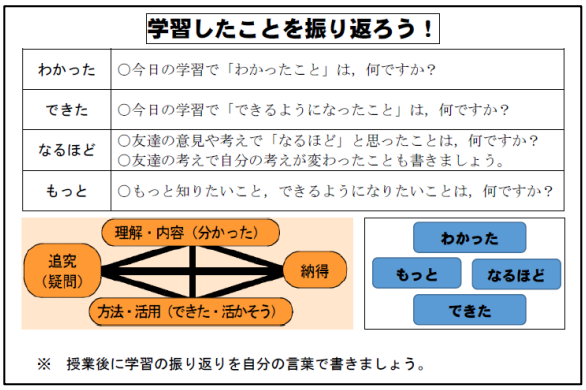


図１３　振り返りの視点

また，自分の学びだけではなく，他者の学びにも目が向けることができます。他者との関わりの中でできるようになったこと，自分にはない他者のよさにも気付くことができ，互いに高め合うこと実感することができるようにしました。

本校では，全ての授業で「振り返り」の時間を設定し，振り返りの視点（**図１３**）を基本としながら，各教科等の特性に応じた視点に沿って振り返り，一単位時間の学びを積み上げることができるようにしました。

イ　指導方法の工夫（**図１２**）

これまでも全ての教科等の目標の達成を目指し授業づくりをしてきました。指導する内容に沿って指導方法を工夫し，子どもが「わかる・できる」を実感する授業づくりをしてきました。

しかし，学習内容を身に付け，目標を達成することが難しい子どもも見られました。そこで，全ての子どもが学習内容や学び方に見通しをもち，主体的に学ぶことができるようにしました。また，他者と関わりながら対話的に学ぶこともできるようにしました。

【友達と交流しながら学びを深める】

（ア）ユニバーサルデザインの視点

子どもが主体的に学ぶためには，全ての子どもが授業の流れに沿って，見通しをもちながら，授業に参加することが大切です。子どもや学級の様子を把握し，それらの特性を理解し，よりよい指導方法を工夫する必要があります。子どもの学習活動が，よりスムーズに進むための手立てについて考えていくことにしました。

授業の流れに見通しをもつために学習の決まりや板書とノートのつながりを工夫したり，単元の学習内容に見通しをもつために学習計画表を作成したりしました。

例えば，社会科の小単元の学習問題を基にして，追究の柱に沿ってまとめ，学習問題の解決を図りました。

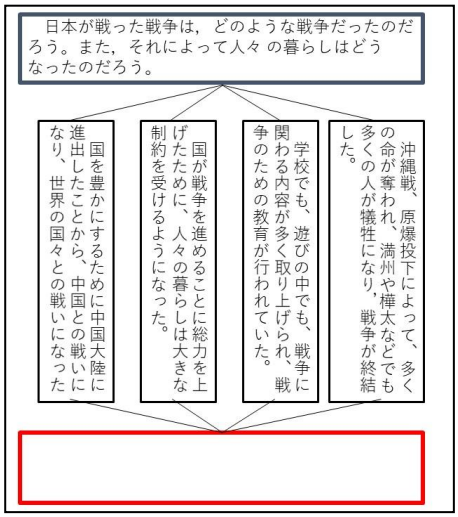
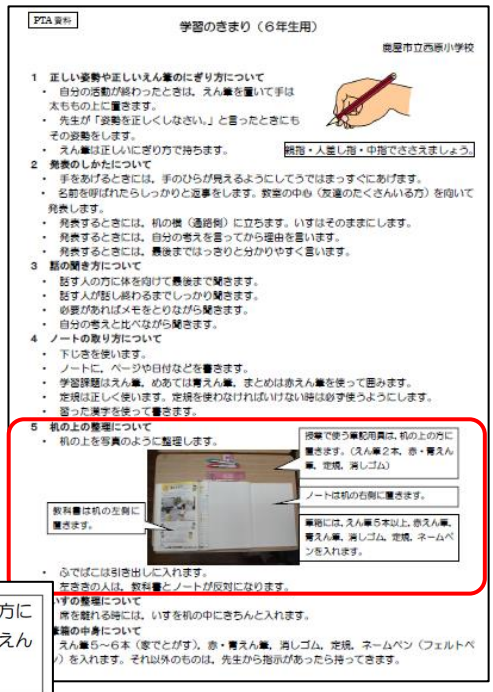


図１４　学習計画表（例）

a　学習のきまり

本校では，子どもの実態に応じた「学習のきまり」を作成し，指導を続けています。子どもが，学習のきまりを身に付けて，授業に臨むことにより，全ての授業の充実を図ることができると考えました。年度当初に，子どもや保護者へ向けて，学習のきまりを示します。子どもに示すことで，授業におけるあるべき姿を見据えることができます。また，保護者に示すことで，学校と同じ言葉掛けを家庭でもすることができます。家庭と協力しながら，進んで学習に向かう子どもを育てていくことにしました。


PTA資料

学習のきまり（6年生用）

鹿屋市立西原小学校

1　正しい姿勢や正しいえん筆のにぎり方について
- 自分の活動が終わったときは，えん筆を置いて手は太ももの上に置きます。
- 先生が「姿勢を正しくしなさい。」と言ったときにもその姿勢をします。
- えん筆は正しいにぎり方で持ちます。

親指・人差し指・中指でささえましょう。

2　発表のしかたについて
- 手をあげるときには，手のひらが見えるようにしてうではまっすぐにあげます。
- 名前を呼ばれたらしっかりと返事をします。教室の中心（友達のたくさんいる方）を向いて発表します。
- 発表するときには，机の横（通路側）に立ちます。いすはそのままにします。
- 発表するときには，自分の考えを言ってから理由を言います。
- 発表するときには，最後まではっきりと分かりやすく言います。

3　話の聞き方について
- 話す人の方に体を向けて最後まで聞きます。
- 話す人が話し終わるまでしっかり聞きます。
- 必要があればメモをとりながら聞きます。
- 自分の考えと比べながら聞きます。

4　ノートの取り方について
- 下じきを使います。
- ノートに，ページや日付などを書きます。
- 学習課題はえん筆，めあては青えん筆，まとめは赤えん筆を使って囲みます。
- 定規は正しく使います。定規を使わなければいけない時は必ず使うようにします。
- 習った漢字を使って書きます。

5　机の上の整理について
- 机の上を写真のように整理します。

授業で使う筆記用具は，机の上の方に置きます。（えん筆２本，赤・青えん筆，定規，消しゴム）

ノートは机の右側に置きます。

教科書は机の左側に置きます。

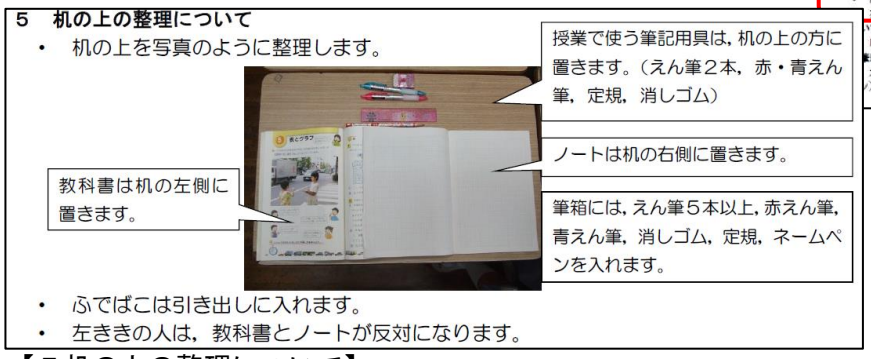
筆箱には，えん筆５本以上，赤えん筆，青えん筆，消しゴム，定規，ネームペンを入れます。

- ふでばこは引き出しに入れます。
- 左ききの人は，教科書とノートが反対になります。

いすの整理について
- 席を離れる時には，いすを机の中にきちんと入れます。

筆箱の中身について
- えん筆５～６本（家でとがす），赤・青えん筆，消しゴム，定規，ネームペン（フェルトペン）を入れます。それ以外のものは，先生から指示があったら持ってきます。

【学習のきまり（６年生用）】


5　机の上の整理について
- 机の上を写真のように整理します。

授業で使う筆記用具は，机の上の方に置きます。（えん筆２本，赤・青えん筆，定規，消しゴム）

ノートは机の右側に置きます。

教科書は机の左側に置きます。

筆箱には，えん筆５本以上，赤えん筆，青えん筆，消しゴム，定規，ネームペンを入れます。

- ふでばこは引き出しに入れます。
- 左ききの人は，教科書とノートが反対になります。

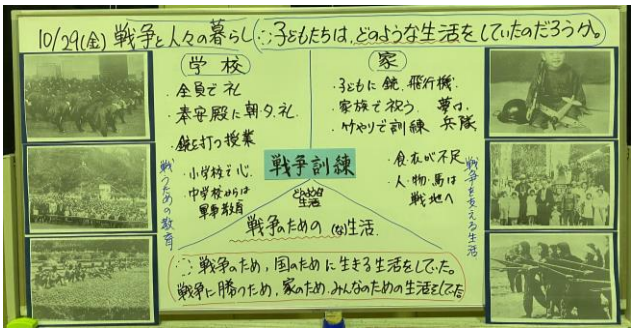
【５机の上の整理について】

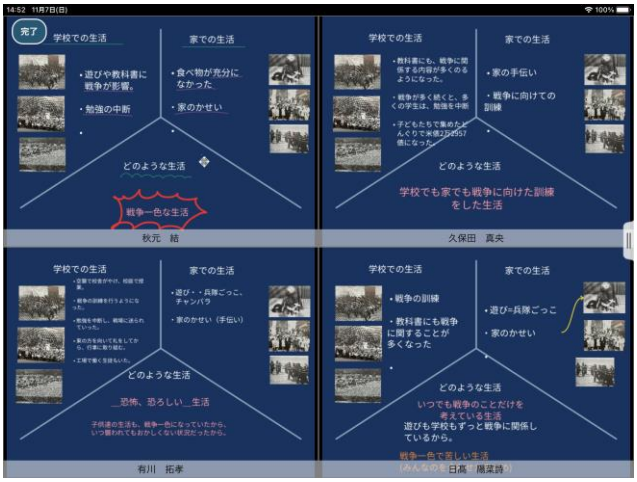
（学習のきまり（６年生用）から）

b　板書の工夫とノートづくり

本校では，授業における板書の工夫をしました。板書の工夫をすることで，各教科等の授業や題材・単元等に見通しをもつことができます。また，一単位時間の学習の流れをつかみ，本時に学習したことを振り返ることができるようにしました。

学習問題やまとめを示すチョークの色を決めたり，子どものノートに合わせて板書を構成したりすることで，子どもの学びを，子どものノートに再現できるようにしました。また，板書を構造化することにより，子どもが板書を基にして，ノートをつくることができるようにしました。子どもが学習したことだけでなく，自分や他者の考えなどを書いたり，振り返りを書いたりすることで，更に学習を深めることができると考えました。





【教師の板書と子どものワークシートの対応】

（イ）交流活動の充実

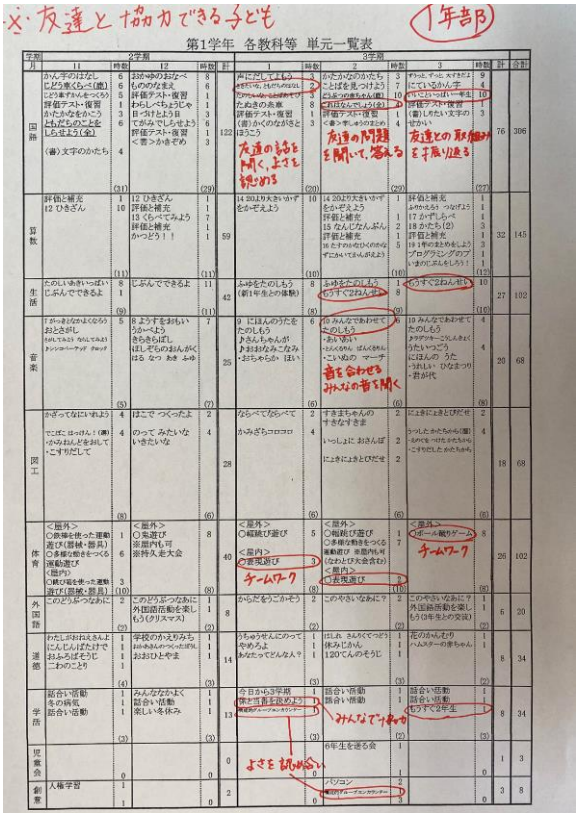
前研究の算数科の研究で，対話活動を取り入れてきました。ペア・グループ活動やワールドカフェ等の方法を用いて，子どもが自分の考えを他者に表現することができるようになってきました。そこで，本研究においても，前研究の対話活動の工夫を踏まえることで，子どもが他者と関わる機会を増やし，互いに高め合うことができるような方法を取り入れることにしました。また，他者との関わりの中で，構築した自分の考えを再構築することができるようにしました。各教科等の授業の進め方でジグソー法などの学習方法を取り入れたり，授業における交流の場で，ワールドカフェだけでなく様々な交流方法（番カフェ，ギャラリーウォーク，他）を取り入れたりすることで，更に学習を深めることができると考えました。

【他者との交流で自分の考えを再構築】

【全体の場における交流活動】

ウ　カリキュラム・マネジメント

本研究の研究領域「心の教育」を進めていくために，育てたい子どもの姿を明確にしながら教科等の学習の中で進めていくことにしました。子どもの実態をもとに，「４つのキーワード」の中から重点を設定し，特に「自己理解」「他者理解」「認め合う力」を高めることにしました。重点として設定したものを深めたり，高めたりするために，関連する題材・単元等をつないで教科横断的に指導していくことにしました。本校の各学年の年間指導計画を基本として，各学期に重点を設定したり，関連する学習内容や指導方法を検討したりするなど，各学年で研究領域「心の教育」を進めていくための計画を立てて，研究を進めることにしました。そうすることで，子どもが自己肯定感を高め，目指す子ども像へと近付くことができると考えました。



【１年３学期「心の教育」を視点にした計画】

（２）授業以外での取組

子ども一人一人が居心地よく感じる学級や高め合う他者との関わりができる環境を整えるためには，授業だけでなく，授業以外の活動にも工夫をする必要があります。子どもが他者と良好な人間関係を築いたり，学級での所属感を感じたりすることで，全ての子どもが安心して学校生活を送ることができると考えました。子どもの過ごす時間が一番長い学級では，各担任が学級経営を行い子どもが魅力的に感じる「学級づくりの工夫」をすることにしました。また，全ての子どもが分け隔てなく関わり合いながら過ごすことができるように「特別支援教育の充実」を図ることにしました。さらに，子どもの課題や問題等にも適切に対応することで，子どものよりよい成長の機会にするための「生徒指導の充実」を図ることにしました。

ア　学級づくりの工夫

学級に在籍する子どもが，学級への所属感をもち，毎日の学校生活を送ることができるような学級づくりを目指していきます。そうすることで，子ども一人ひとりが，自分のことだけでなく他者へも目を向け，互いの関わりを大切にしながら過ごすことができると考えるからです。

そのためには，子ども一人ひとりが居心地のよい環境づくりをしていきます。教室環境を整えたり，学級での規律を正したりすることで，子ども一人ひとりが学級をよりよくしていこうとする意欲を高めていきます。また，互いに高め合う活動を取り入れることで，子どもの関わりのよさを実感したり，授業を含む全ての活動で協働する力を高めたりしていきます。

（ア）構成的グループエンカウンター

子どもが学級の一員である自覚をもって過ごすために，構成的グループエンカウンターに取り組んでいます。

月に１回の朝の活動の時間と学期に２時間を位置付けて取り組んでいます。活動例を基にして，学級や学年の実態に合った活動を選んで取り組んでいます。

活動に用いたワークシートは，エンカウンターファイル「心のたからばこ」に綴じて，活動の記録を積み上げています。

【１年「みんなでじゃんけんポン！」の様子】

（イ）教室の設営

子どもが学校生活のほとんどを過ごす教室の設営に気を配ることで，子どもが学級への所属感をもち，学級の友達一人ひとりを大切にすることができるようにしました。

学級全員の名前があることや子どもの作品への称賛のコメントがあることで，自分の作品に自信をもち，他者から認められる一人である自覚をもてるようにしました。

【全ての子どもの作品への称賛のコメント】

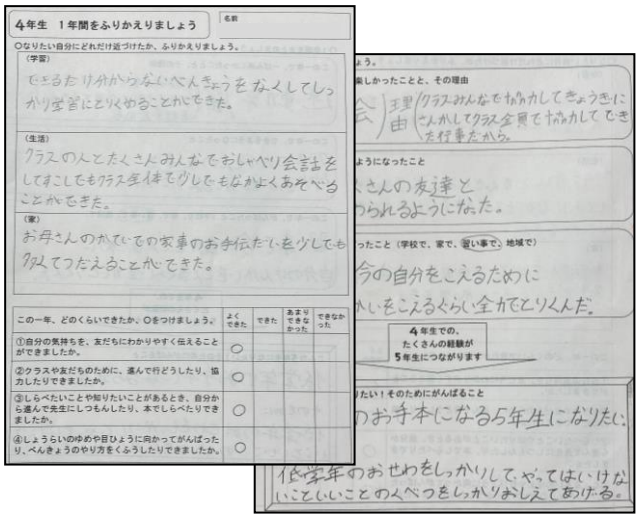
イ　特別支援教育の充実

子ども一人一人には，個性があります。子どもが自分自身で感じる自分の姿は，他者に映る姿よりも評価が低いことがあります。また，子どもが自分自身の姿と自分に映る他者の姿を比較して，自分と異なる姿を認めることができないこともあります。子どもが他者を受け入れて，一人一人の個性を尊重することができるような学級経営をする必要があります。

そのためには，子どもが自分のことを多面的に理解することが大切です。自分の思いだけでなく，他者に映る自分の姿を見つめることで，他者を理解するきっかけになります。自己を見つめたり，他者を見つめたりすることで，相互に理解し合い，よりよい関係をつくっていきます。

（ア）自己理解の手立て

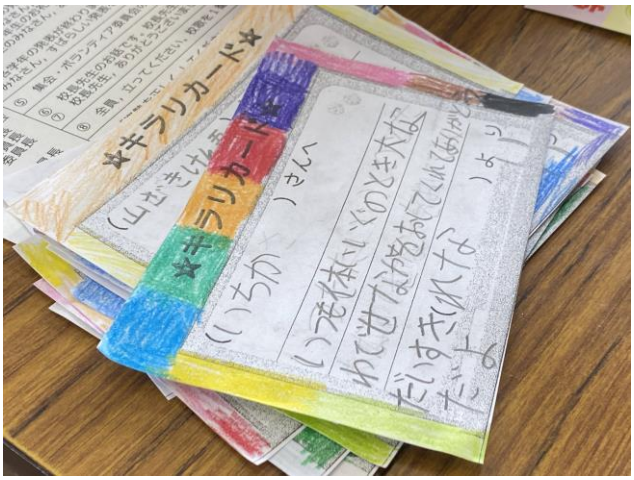
子どもは毎日の学校生活の中で，多くの他者と関わりながら過ごしています。中にはうまくいかないこともありますが，自分のことを客観的にとらえたり，他者からの言動を受け入れたりしながら，自己理解を深めていきます。自分の長所や得意は更に伸ばしつつ，自分の短所や不得意を受け入れながら，過ごすことができるようにしました。例えば，構成的グループエンカウンターの活動やキャリア・パスポートの記入で，自己理解が深まるようにしました。



【キャリア・パスポートによる振り返り】

（イ）他者理解の手立て

子どもは自己理解を深めるとともに，他者との違いにも気付き始めてきます。自分と同様にあるものを良いこととし，自分と異なるものを区別しようとすることがあります。一人ひとりの異なった人は，それぞれ異なった自分をもち，他者と異なることを理解するようにしました。例えば，「友達のキラリ」を書くことで，他者を見つめる時間を設定するようにしました。



【友達のよさを書いた「キラリカード」】

（ウ）自他の理解を深める手立て

子どもは，一人ひとりに個性があります。自己を理解し，他者との違いを理解しながら，一人ひとりの個性にも気付くことができます。自他の違いを個性として認め，特性が強く見られる子どもに対しても，認め合うことができるようにしました。例えば，障害理解教育を行うことで，支援を要する子どもへの理解だけでなく，関わる全ての子どもへの理解を深めることができるようにしました。特別支援学級に在籍する子どもの理解も深まるようにしました。

ウ　生徒指導の充実

多くの子どもが関わり合いながら生活する中には，うまくいくこともあれば，うまくいかないこともあります。子どもの自己に理由があったり，他者と関わることに理由があったり，理由は多様であることが多くあります。子ども一人ひとりが成長をしていくためには，うまくいく経験だけでなく，うまくいかないことを乗り越える経験も必要となります。それらの一つ一つの成功体験を積み上げながら，子どもが他者と関わり合いながら成長することができるようにしました。

そのためには，全ての子どもが基本的な生活を送ることができるような環境を整えていきます。子どもが多くの他者と関わる機会を整えたり，生まれる課題に一つ一つ乗り越えることができるような経験を積んだりすることができるようにしていきます。

（ア）キラリカードの活用

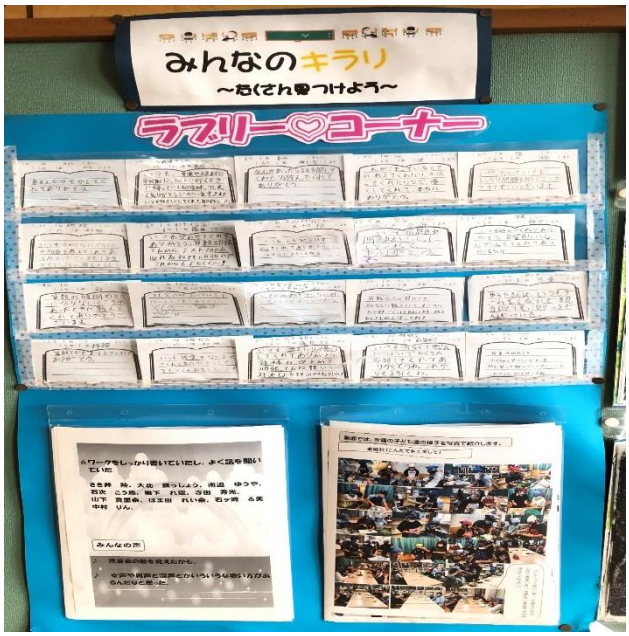
子どもの関わりを深めていくために，友達のよさを書いた「キラリカード」の取組を進めることで，他者への関心が高まる子どもの姿が見られました。

個々の関わりを更に広げるために，各学級で紹介したり，教室に掲示したりするようにしました。自分だけでは見つけることができなかった友達のよさや自分と異なる友達の見方に気付き，これまで以上に他者と関わろうとするきっかけを作ることができるようにしました。

「キラリカード」を紹介するための掲示だけでなく，日頃の学校生活の中にある子どものよさを紹介したり，頑張っている姿を取り入れた「学級ラブリーコーナー」を作ることにしました。

「キラリカード」を生かした取組を進めることで，友達のよさを探して見つけようとする他者理解の見方が育ち，友達から認められた自分の新たな一面に気付く自己理解にもつながり，子ども同士が互いに認め合おうとする姿が見られるようになりました。

【各学級で「キラリカード」の紹介】



【教室に設置した「学級ラブリーコーナー」】

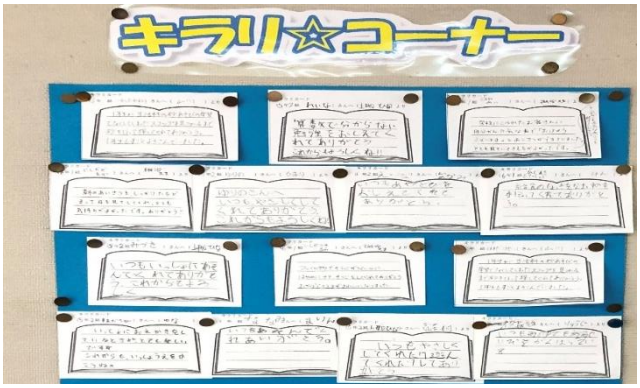
（イ）学年キラリコーナー

各学級で取り組んでいる「キラリカード」の取組を学年でも広げることにしました。共に学校生活を送る学年の友達にも輪を広げ，同じ学年で頑張っている友達の姿やよさを見つけ，紹介することができるようにしました。身近な友達だけでなく，広く他者に目を向けて過ごし，学年全体の中にも子ども同士が認め合う雰囲気を作ることができるようにしました。

（ウ）学校キラリコーナー

学級・学年での「キラリカード」の取組を学校全体にも広げるために，職員室前に「学校キラリ☆コーナー」を設置することにしました。同じ学級・学年だけでなく，他の学年の友達のよさを紹介して，全校で共有することができるようにしました。

「キラリカード」をポストに投函すると学校キラリコーナーに掲示されたり，給食時間の校内放送で紹介されたり，全校での共有が図ることができます。手本になるような言動を紹介することで，よりよい他者との関わりを見つめる機会にしました。また，紹介された子どもが友達から称賛を受けることで，更によりよい行いをしようとする意欲を高めたり，友達から認められる存在として自信をもったりすることができるようにしました。



【職員室前の「学校キラリ☆コーナー」】

【キラリ☆コーナーに投函する子ども】

（エ）学年パネル「○年生のキラリ」掲示

子どもは，毎日の学校生活の中で，多くのことを学び，成長しながら過ごしています。多くの学校行事への取組だけでなく，日常の姿にも目を向けるようにしました。日直や給食当番，掃除時間に自分の任されたことをやり遂げている姿が見られ，係活動や委員会活動など，役割分担をしたり，創意工夫をしたりしながら取り組む姿も見られました。さらに自主的なボランティア活動に取り組む姿も見られ，成長を感じるようになりました。

目指す子どもの姿に近い子どもの取組を紹介したり，次年度の子どもの目標として残したりするために各学年のパネル「○年生のキラリ」を作ることにしました。子どもの姿に認め合う言葉を関連付けてパネルを作成することで，子どもの活動を価値付けするようにしました。

【学年パネル「６年生のキラリ」】

（オ）掲示「あったかことば」

子どもが自ら発する言葉，他者に掛ける言葉によって，他者との関わりが異なります。子ども同士が認め合うための言葉を知ることで，場面に応じた言葉掛けができるようになると考えました。多様な相手に対して，自分の気持ちが伝わる「あったかことば」を使うことによって，よりよい人間関係を築くことができると考えました。

【教室掲示「あったかことば」】

子どもが学校生活の中で一番長く過ごす教室に「あったかことば」を掲示することで，子どもが日頃から意識して使うようにしたり，教師が場面に応じて示したりすることができるようにしました。

また，階段にも「あったかことば」を掲示することで，教室に向かって階段を上りながら読み上げたり，口ずさんだりすることで，前向きな気持ちで教室に入ることができるようにしました。

【階段掲示「あったかことば」】

子ども同士が「あったかことば」を使い合うことで，互いに認め合う機会を増やし，学校生活や授業の中でも相手の気持ちに配慮した言葉掛けができるようにしました。

（３）家庭・地域との連携

子どもは，学校内だけでなく学校外でも多くの人と関わりながら過ごしています。家庭や地域での社会の中でも生活しており，多くの異年齢の他者とも関わりながら過ごしています。

本研究の研究領域「心の教育」は，子どもに関わる多くの他者との連携を図ることで，よりよい経験を加えることができると考えました。子どもが学校生活で学んだことを社会生活の中で生かしたり，多くの他者との関わる社会生活で身に付けたことを学校生活の中で生かしたり，よりよく成長する子どもの姿に期待をもつことができると考えました。

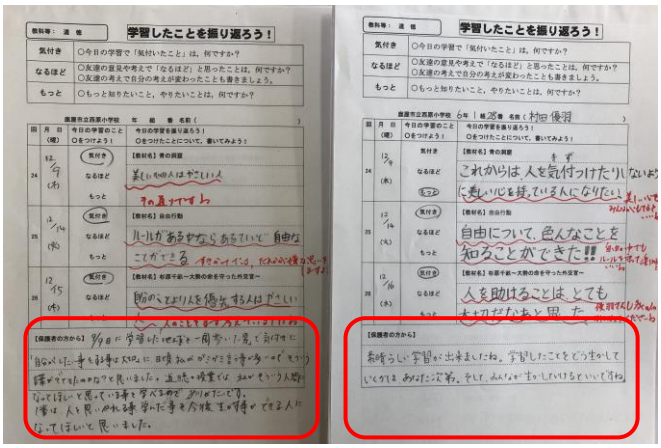
ア　家庭との連携

子どもの社会生活の基となる家庭と連携を図ることで，学校教育における教育効果を高めることができると考えました。学校で子どもが学んでいることを知ることで，家庭でも同様の言葉掛けをすることができます。学校で取り組んでいる校内研究について家庭に示したり，設定している目指す子ども像や研究に関連する学習内容を知らせたりすることで，同じ方向を向いて子どもに関わることができると考えました。

【道徳ノートに振り返りをする子ども】

（ア）道徳ノート「振り返り」

道徳科の授業でも「振り返り」に取り組んでいます。道徳ノートの裏表紙に振り返りカードを貼り付け，「気付き」「なるほど」「もっと」の３観点において，子どもの思いや教師の指示に沿って振り返りをすることができるようにしました。道徳科の授業の振り返りに記された子どもの学びや変容を教師が見取るだけでなく，保護者とも共有し，子どもの道徳科の学びが深まるようにしました。



【振り返りカードへの保護者のコメント】

（イ）キラリ通信の発行

学校で取り組んでいる研究の様子や研究に係る子どもの様子を伝えるために「キラリ通信」を発行することにしました。年度当初には，研究の概要や重点とする取組を紹介し，年度末には，１年間の成果や課題を紹介しました。

年間を通して，全学年の取組を特集し，学年の子どもの実態や発達段階に応じた通信にしました。

例えば，道徳科の授業のねらいや様子を知らせることで，子どもがどのような価値を学び，どのような考え方をもとうとしているのかを知ることができます。また，学校行事の成功へ向けて，学級や学校での取組を知らせることで，学年で取り組んでいることを話題にすることができます。

キラリ通信が，学校と家庭とをつなぐ通信になり，子どもとの関わりを深めることができるようにしました。

【キラリ通信　令和４年度　第２号】

（ウ）学級通信「今週のキラリ」

子どもが学校生活の中で一番過ごす学級の教室であり，一番長く子どもを見るのは学級担任です。毎週の学級の様子を伝える学級通信の中に「今週のキラリ」のコーナーを作ることにしました。子どもが頑張っていることやよい行いなどを紹介することで，学級全体で子どものよさを称賛することができるようにしました。また，家庭とも共有することで自分の保護者だけでなく友達の保護者からも称賛されるなど，子どもの認められる機会を増やすようにしました。

【学級通信の「今週のキラリ」コーナー】

イ　地域との連携

子どもが社会生活の一つとして関わる地域との連携を図ることで，学校教育における教育効果を高めることができると考えました。地域との連携を図ることで，学校や家庭だけでは実現できない教育活動を実現できます。学校における教育活動を知らせたり，協力を求めたりすることで，学校教育における地域からの協力を得て，子どもの学びの充実を図ることができます。学校を中心として，地域との連携を深め，子どもを地域全体で育てていくことができるようにしました。

（ア）学校応援団の活用

子どもの学びを深めるために，学校応援団の活用を図ることにしました。学校応援団とは，学校の教育活動を支える保護者を含んだボランティアのことで，多くの授業で協力をもとめています。保護者だけでなく，地域の人材を活用することで，教室の中だけでは学ぶことができない事象にふれたり，多くの人々との関わりをもつようにしました。

例えば，２年国語科「スーホの白い馬」で主人公が奏でる馬頭琴の音色を聴いたり，実際に触れて弾いたりすることで，教材文の世界に実感をもつことができました。また，講師による話から教材文の中にある世界の様子を知ることができ，学びを深めました。

１年生活科「冬を楽しもう」で昔遊びの体験に校区内の高齢者クラブからの協力を得ることができました。高齢者の方々からは，子どものためになるのであれば，と多くの参加をいただき，昔遊びを通して，子どもとの交流を図ることができるようにしました。

【２年国語科「スーホの白い馬」馬頭琴体験】

【１年生活科「冬を楽しもう」昔遊び体験】

（イ）地域を学ぶ機会

子どもが過ごす地域をこれまで以上に身近に感じるために，校区や市の様子を学習の中に取り入れ，地域を学ぶ機会を増やしました。身近な地域のよさを見付けたり，歴史を知ったりすることができるようにしました。

例えば，６年社会科「戦争と人々のくらし」では，史料館で戦争と地域のことを学び，ふるさとの歴史に関心を高めていました。

子どもが自分の過ごす地域を知り，地域の人々と関わることができるようにしました。

【６年社会科「戦争と人々のくらし」見学】